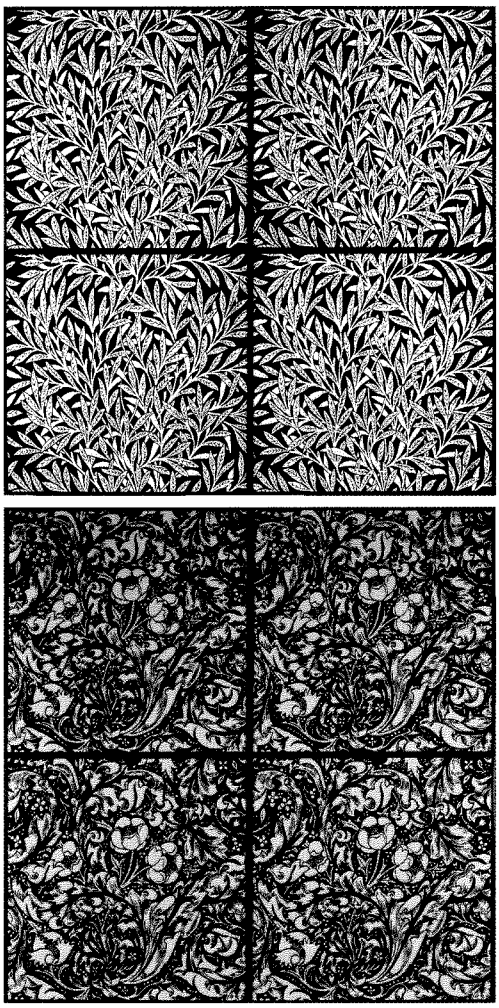
井上勝江
板画　三部作
ウイリアム・モリスによる「アカンサスの図」
制作　2011年

2016年7月 会報74号
一般社団法人
日本建築美術工芸協会



井上勝江

新潟県生まれ
1976　日本板画院同人
　　aaia 賞（建築美術工業協会）
　　日本玩具シリーズ（米田工房刊）
1982　日本板画院理事（1982-99）
2007　第57回板画院 棟方志功賞
2015　府中美術館 版画がつなぐ心とココロ 棟方末華 井上勝江展

現在　日本板画院同人、同院評議員、日本美術家連盟会員
よみうり文化センター町田講師、
日本建築美術工芸協会会員

濁墨（どぶすみ）で私の植物たちは表現されています。
墨は五彩を秘めていると云われています。特別に漉(す)いて頂いている越前和紙の美しい風合いが私の作品を創り出してくれていると常に思っております。
棟方志功先生が「花と云えば井上、井上と云えば花」となるように励まして下さり今に至っても花と共に創作に進んでおります。

上　ウイリアム・モリスによる「柳葉の図」
下　ウイリアム・モリスによる「ヤグルマギクの図」
制作2010年

CONTENTS

平成28年度通常総会		3
新入会員・会員の異動		5
第55回aaca講演会　「病院建築とアートのこれから」	藤田　衛	6
第187回aacaフォーラム「日本の伝統音楽を語り囃子を奏す　邦楽の魅力」	望月太左衛	8
第56回aaca講演会　「環境建築の未来」に参加して	三宅賢一	9
時代の華一輪　「私の木版画展」	香川　亮	10
時代の華一輪　「美津島徳蔵 —— 画廊ビルを舞台に」	天方光彦	11
時代の華一輪　「アーティストと経営」	古後信二	12
会員活動レポート　「日本橋の戦前倉庫をギャラリーに」	石川雅英	13
「竹中工務店の仕事と写真家の眼」に参加して	岩井光男	14
aaca 2015 街なかミュゼ活動 第2弾の開催	展覧会委員会	15
あわい展「色と形、手の仕事 2016」の開催		20
あわい展に参加して	藤原和子	21
アピアランス		22
広報委員会紹介他		24

平成28年度　通常総会

平成２８年度通常総会は　６月９日(木)午後５時45分より建築会館大ホールにて、現会員数３６３名(個人会員２６５名・法人会員９８名、定足数２４３名)の内２５２名(出席者７７名、議決権行使書・委任状提出１７５名)の出席を得て開催された。定款15条の定めにより会長の岡本　賢が議長に選任され、又同18条により総会議事録署名人に飯田郷介・二本柳 敏会員の2名が指名され総会が開始された。

岡本会長

岡本会長 挨拶

皆様　28年度通常総会に大勢お集まり頂き有難うございます。 こんにち、協会は会員の皆様の活発な活動をして参りました。会員数も少しずつ増えておりますしＡＡＣＡ賞への応募数も増え、景観シンポジウムなどの大きなイベントへも多数の参加をいただいております。

27年度は講演会、街に飛び出す展覧会・街なかミュゼ、建物視察会、地域との文化交流など、多岐にわたって事業を展開し、また大勢の会員に参加をいただいた事は、協会の活動が会員の皆様へ浸透してきたのではないかと感じているところであります。

本日の総会では、27年度のいろいろな事業の総括をさせて頂き、また決算も議題に挙げております。

27年度はおかげ様でまずまずの黒字決算となり、協会としてはそこそこの決算をすれば十分ではないかと考えておりますので、良い結果となりました。

会員数の増加に関しましては、数年前より会員増強委員会を設けまして委員の方々が活発に活動して頂き、このような結果が得られたことに感謝しております。

また、理事1名の方の交代についても議題に御座いますのでご審議頂きます。

28年度は、会員の皆さまが協会活動に活発に参加頂き、昨年を上回る様な状況にもっていければと願っております。そのために委員会組織の若干の変更等も盛り込みたいと思います。 30周年が近づいております、その記念事業を活発に行いたいと考えております。 その為には事務局の機能を充実させる必要があり、人件費の枠も確保してゆかねばならないという課題が持ち上がっておりますので、28年度事業につきましては収益性についても目配りをして活動して頂く様、念願している所でございます。

新しい会員の皆さまには、新しい視点で新しい企画を提案頂き、新鮮な息吹を吹き込んで頂き、協会の活動がさらに活発になるよう念願し、ご挨拶と致します。

議　事

第一号議案・平成27年度事業報告に関する件を岩井副会長、第二号議案・平成27年度　貸借対照表、正味財産増減計算書、財産目録及び収支計算書に関する件を石田理事・事務局長より提案説明があり、また村松監事より27年度の会計及び業務について監査報告がなされ、議長採決の結果、一号・二号議案は、満場一致にて承認された。

第三号議案・長期会費滞納会員の処遇に関する件も提案どおり議長採決により、満場一致にて承認された。

第四号議案・平成28年度理事の選任について議長より提案があり、退任された芦原太郎氏の後任に、斎藤公男氏の就任が、採決により満場一致にて承認された。

最後に平成28年度事業計画・委員会組織の変更、事業予算書について石田理事・事務局長より報告があり、平成28年度通常総会は滞りなく終了した。

総会の後、平成27年度AACA賞特別賞を受賞された「大手町タワー」「ザ・リッツ・カールトン京都」の2作品についてそれぞれの受賞者よりプレゼンテーションが行われた。 その後、岩井副会長の発声で交流会が開かれ、会員の交流が深められ、新入会員の紹介もあり、最後に安河内副会長の中締めにより散会した。

（司会　立石博巳総務委員会副委員長）

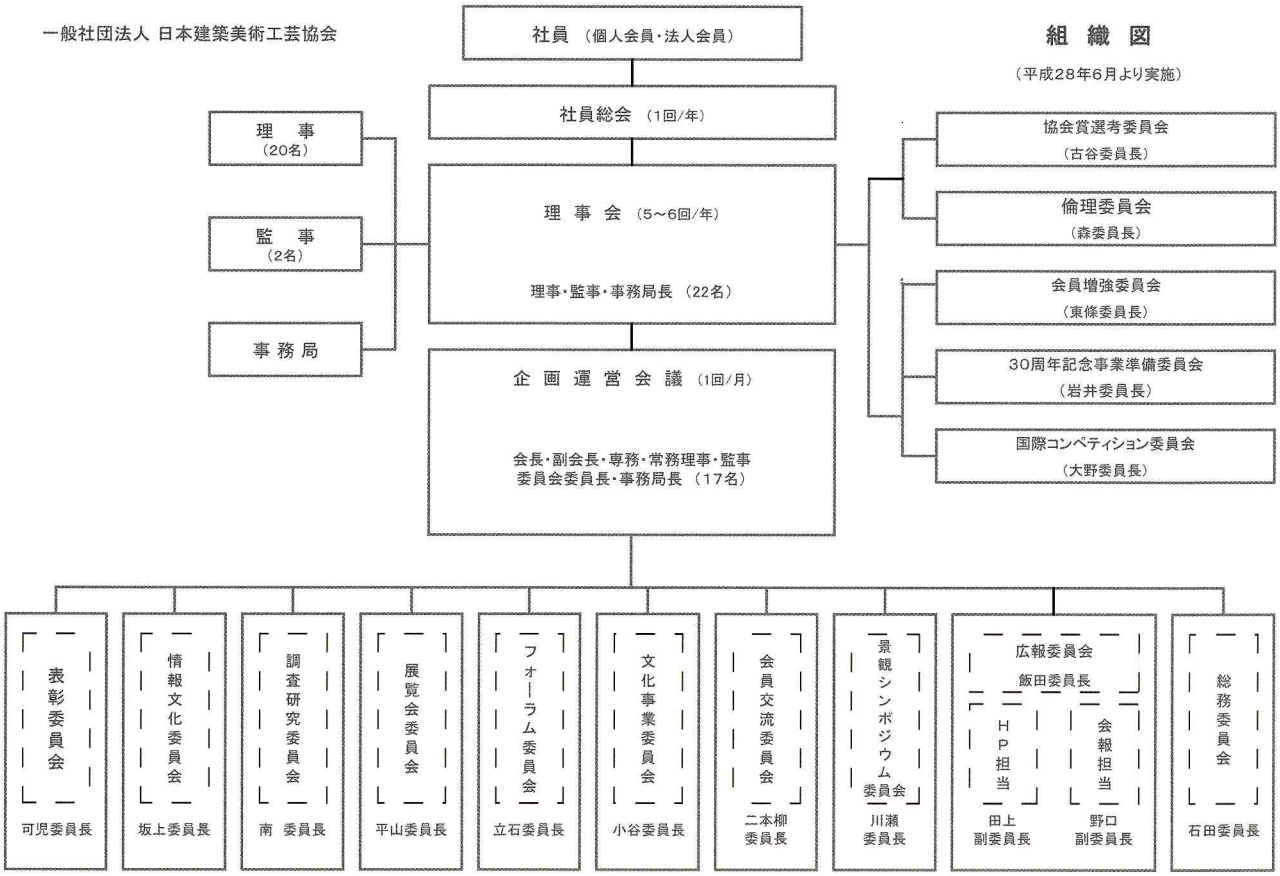
平成28年度　協会役員の紹介

会　長	岡本 賢	理　事	大成 浩	理　事	日置 滋
副会長	岩井光男	〃	尾崎 勝	〃	本 耕一
〃	岡 房信	〃	亀井忠夫	〃	森 暢郎
〃	安河内敦子	〃	可児才介	〃	米林雄一
専務理事	川瀬俊二	〃	斎藤公男（新任）	〃	六鹿正治
常務理事	大野 勝	〃	佐藤仁美	〃	石田眞人
〃	森田高年	〃	東條隆郎	監　事	村松映一
				〃	中島三枝子

一般社団法人 日本建築美術工芸協会

組織図

（平成28年6月より実施）



◎特別委員会

・協会賞選考委員会
　委員長　古谷誠章
・倫理委員会
　委員長　森 暢郎
・会員増強委員会
　委員長　東條隆郎
・３０周年記念事業準備委員会
　委員長　岩井光男
・国際コンペティション委員会
　委員長　大野 勝

◎常置委員会

・表彰委員会
　委員長　可児才介
　副委員長　六鹿正治
・情報文化委員会
　委員長　坂上直哉
　副委員長　露口典子
・調査研究委員会
　委員長　南 三一郎、
　副委員長　小野寺優元
・景観シンポジウム委員会
　委員長　川瀬俊二
・文化事業委員会
　委員長　小谷純造
　副委員長　秋山光和・上原政幸
　　水谷裕一・山崎賢治
・会員交流委員会
　委員長　二本柳 敏
　副委員長　島本健司・白石健二
　　高安晃久
・フォーラム委員会
　委員長　立石博巳
　副委員長　中村茂幸
・展覧会委員会
　委員長　平山健雄
・広報委員会
　委員長　飯田郷介
　副委員長（会報担当）野口真理
　〃　（ＨＰ担当）田上秀司
・総務委員会
　委員長 石田眞人
　副委員長　立石博巳

新入会員・会員の異動　2016年3月～2016年6月　（敬称略）

新入会員

個人会員

近田玲子	〒170-0002	豊島区巣鴨5-40-7　東棟	TEL 03-5980-8390	㈱近田玲子デザイン事務所
ﾂｲﾋﾞｼﾞｶｽﾞﾏｻ	〒153-0061	目黒区中目黒3-16-19	TEL 03-3712-5095	
田中ショウ	〒162-0805	新宿区矢来町23-8	TEL 03-3260-8977	
石川雅英	〒103-0016	中央区日本橋小網町16-16	TEL 03-5847-7785	Architects Office 一級建築士(事)
小野寺恵美	〒339-0067	さいたま市岩槻区西町4-1-33	TEL 048-757-2152	
樋口恭一	〒350-2213	鶴ヶ島市脚折1426-19	TEL 049-285-9573	
長沢晋一	〒336-0026	さいたま市南区辻3-9-11	TEL 048-864-3227	
笹岡慶鳳	〒369-1216	大里郡寄居町富田3568-6	TEL 048-582-4482	
今井伸治	〒945-1502	柏崎市高柳町岡野町1750ｸﾞﾙｸﾞﾙハウス高柳	TEL 0257-41-5700	ステンレス造形
山下治子	〒108-0014	港区芝4-3-2-110	TEL 03-6453-7878	㈱アム・プロモーション
田島一宏	〒272-0103	市川市本行徳18-10-701	TEL 080-9908-2923	㈱UDA
置鮎早智枝	〒144-0053	大田区蒲田本町1－1－1－1405	TEL 03-3738-6337	
新實広記	〒444-0076	岡崎市井田町山王48 山王マンション302	TEL 090-2923-9844	愛知東邦大学
堀越英嗣	〒104-0061	中央区銀座1－19－8－3F	TEL 03-5250-5350	㈱堀越英嗣ARCHITECT5

法人会員

㈱カネカ	取締役専務執行役員　田中　稔	担当　経営企画部経営企画グループ　加藤　淳	
〒107-6025	港区赤坂1-12-32	TEL 03-5574-8000	
㈱鎚絵	代表取締役　藤波耕司	担当　東京営業所　所長　大野浩介	
〒803-0802	北九州市小倉北区東港1-1-21	TEL 093-561-2511　（東京　TEL 03-5787-8085）	
髙島屋スペースクリエイツ㈱	取締役　東日本営業部長　梨本辰男	担当　東日本営業部 3G 小針啓二・菅野重雄	
〒103-8218	中央区日本橋茅場町2-12-7　高栄茅場町ビル	TEL 03-5652-1210	
元旦ビューティ工業㈱	取締役営業本部長　坂本　浩	担当　東京支店販売促進グループ　小松崎　純	
〒252-0804	藤沢市湘南台1-1-21　湘南台イーストプラザ	TEL 0466-43-2157	
㈱東芝	部長　市橋秀俊	担当　事業開発センター国内開発営業部　高崎繁範	
〒212-8585	川崎市堀川町72-34	TEL 044-331-0720	
ﾊﾟﾙﾏｽﾃｨｰﾘｻﾞ・ｼﾞｬﾊﾟﾝ㈱	代表取締役社長　佐々木俊之	担当　総務部　小川尚子	
〒102-0076	千代田区五番町12-1　番町会館4F	TEL 03-5275-8420	
ﾊﾟﾅｿﾆｯｸ㈱ｴｺｿﾘｭｰｼｮﾝｽﾞ社	ｿﾘｭｰｼｮﾝﾗｲﾃｨﾝｸﾞﾃﾞｻﾞｲﾝ部　部長　神谷　実	担当　代表者と同じ	
〒105-8301	港区東新橋1-5-1	TEL 03-6218-1020	
電気硝子建材㈱	専務取締役　太田　貴	担当　代表者と同じ	
〒130-8513	墨田区立川4-15-3	TEL 03-3632-7824	
㈱YAMAGIWA	東京ソルーション営業部統括　生澤克元	担当　東京営業本部　寒川和幸	
〒105-0014	港区芝3-16-13	TEL 03-5418-9061	
㈱サンゲツ	法人営業部　部長　森田　剛	担当　代表者と同じ	
〒140-8611	品川区東品川3-20-17	TEL 03-3474-1245	
東芝エレベーター㈱東京支社	上席常務東京支店長　関川成之	担当　営業第三部　佐藤克彦	
〒140-0014	品川区大井1-28-1	TEL 03-5718-0360	
阪和興業㈱	取締役常務執行役員　長嶋日出海	担当　プロジェクト開発部　杉嶋英勝	
〒104-8429	中央区築地1-13-1	TEL 03-3544-1839	
内山緑地建設㈱	取締役関東統括部長　関根 武	担当　代表者と同じ	
〒104-0032	中央区八丁堀3－5－8　京橋第2長岡ビル7階	TEL 03-3523-1140	
㈱J・クリエイト	代表取締役　佐藤　敏	担当　代表者と同じ	
〒103-0004	中央区東日本橋3-7-19　友泉東日本橋駅前ビル9F	TEL 03-6667-5866	
関東宇部コンクリート工業㈱	営業統括部　部長　青木　崇	担当　代表者と同じ	
〒141-0032	品川区大崎3－5－2　エステージ大崎6階	TEL 03－5759-7691	

会員の異動

個人会員

山本　誠	住所変更	豊島区雑司が谷1-45-3-103　TEL 090-8857-5182
宮本仁夫	氏名変更	㈱宮本忠長建築設計事務所代表取締役所長（宮本忠長会員逝去に伴い変更）

法人会員

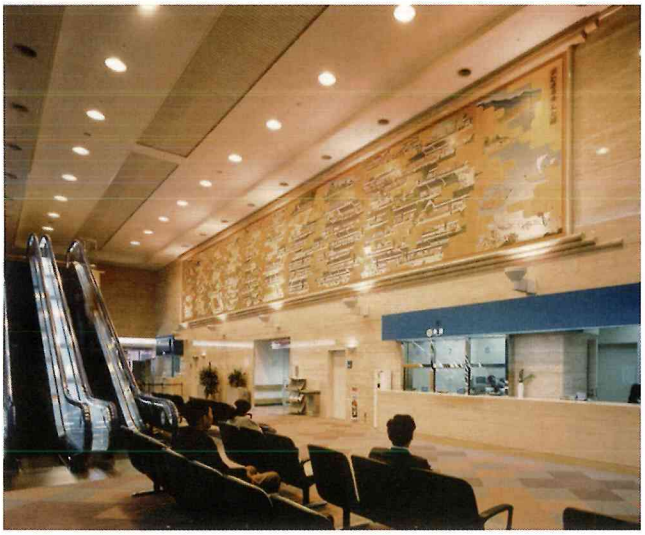
㈱クマヒラ	担当者変更	牛込清隆　企画本部企画部製品企画室室長　（前任　若林　健）

藤田 衛
一級建築士
株式会社 山下設計
取締役常務執行役員本社長

病院建築とアートのこれから

我が国の病院に積極的にアートが置かれるようになったのは1960年代の初め頃からではなかったかと思う。いわゆる国民皆保険制度がスタートしたのが1961年、その後、医療のフリーアクセス化が進み、病院建築が誰もが等しく利用できる公共施設としての性格を強めていった時期と重なるのは偶然ではないだろう。つまり我が国の病院建築におけるアートの端緒は、公共空間に置かれるパブリックアートであったといえる。

そのため当時のアートは、病院の中でもエントランスまわりや総合受付ホールといった公共的性格の強い空間に、比較的大きな壁画や彫刻などのかたちで設置されることが多かった（写1）。



写１：パブリックアートとしての病院アート

そのような状況に変化が生じ始めたのは、ちょうど筆者が病院建築の設計に携わり始めた1990年代の初めからである。その変化は、アメリカの学者、R. S. ウルリッチ（Roger S. Ulrich）の論文、「窓からの自然の眺めが術後の回復結果に及ぼす影響　1984（View through a window may influence recovery from surgery, 1984)」によるところが大きいと考えている。ウルリッチの論文によると、“手術後、窓から緑の木立の見える病室で療養した患者は、レンガ塀しか見えない病室で過ごした患者に比べ、在院日数が短く、強い鎮痛剤の要求量が少ない”ということを実証したという。つまり、患者のまわりの環境が病の回復や治癒に大きく影響する、というのである（図1）。

この論を受け、我が国でも1980年代後半から1990年代初めにかけ「ヒーリングエンバイロメントhealing environment」、「癒しの環境」、「治癒的環境」といった言葉が、病院建築の設計の場で頻繁に使われるようになっていった。そのような流れの中で、環境を形づくる重要な要素の一つであるアートも病の治癒に効果があるはず、と考えられ始めたのである。

図１：ウルリッチの論文

病の回復と患者の環境の関係では、ナイチンゲールNightingaleを語らないわけにはいかないだろう。19世紀のイギリスで、ナイチンゲールは“空気、陽光、温度など療養環境（患者のまわりの環境）が大切であり、それらの質を高めることが患者の回復につながる”と説いたのである（図2）。ナイチンゲールの思想は現代の病院建築の設計者の間で既に定着していたため、それを実証したウルリッチの説も抵抗なく浸透していった。このことが1980年代後半以降の病院アートのあり方に大きな変化をもたらしたと考えている。

こうして我が国の病院アートは、公共空間に置かれるパブリックアートとしてではなく、むしろプライベートな空間（病棟や病室、待合など）に、病の治癒や回復のための環境装置として捉えるケースが多くなっていったのである。

図２：ナイチンゲールの思想

病院アートの役割が変化し、大きな壁画や彫刻などのいわば一点豪華主義から、ヒューマンスケールのものを院内に数多く配置することが多くなってきている（写2）。

アートの数が増えれば、アート全体を通して一定のテーマに基づくプランニングが重要になる。さらに、設置する場所と作品のモチーフとの関係に関する細かな配慮や調整も必要である。このような仕事を、アートに関する専門知識と多数の作家とのコネクションを持つコーディネーターに依頼するケースも増えている。

写２：ヒューマンスケールの病院アート

我が国は今、団塊の世代が75歳以上となる2025年を目途に、住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるように、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステムの構築を目指している。地域包括ケアシステムの実現には、医療や介護に地域住民が積極的に関わる環境づくりが鍵となる。

私たちが設計した福岡市立こども病院では、市内の小中学生が描いた絵をアートやサインに取り込んでいる（写3）。地域と医療をつなぐ試みの一つである。福岡のようにそのための道具としてアートを活用するケースも増えてきており、病院アートの新しいあり方の一つとして注目されている。

病院アートはこの半世紀、大きく変貌してきた。我が国は今や世界でトップを走る高齢国であり、これからの日本の医療のあり方に世界が注目している。病院アートの新たな可能性についても、さらなるチャレンジが求められているといえるだろう。

写３：福岡市立こども病院のアートと市内小学校のワークショップの様子

望月太左衛
邦楽囃子方（音楽博士）
伝統芸能教場・鼓楽庵代表
特定非営利活動法人
日本音楽囃子文化研究会理事長

「アートと音楽の垣根を越えて」

アートと音楽の垣根を越え、ともに芸術として社会の中で歩む道を学生時代から探してまいりました。大学を卒業して40年が経とうとしている中、東京・台東区のいりや画廊さんとの出会いがありました。ホールや劇場ではなく、画廊で！日本の伝統芸能を聞いて観て体験していただく「ニッポン音展」を2013年から始めました。

ひとことで伝統芸能と申しましてもその範囲は広く、細分化しています。たとえば雅楽は平安時代から、能楽は室町時代から、歌舞伎は江戸時代から、それぞれが創始以来の形を変えずモザイクのように現代まで伝承されています。私が専門にしている「囃子」は、現在その中であらゆるジャンルの伝統芸能と関わりがある音楽です。「囃子」を入口に伝統芸能のエッセンスを感じていただくことが今回の講演の主旨です。

まず、アートと音楽とのつながりを探す中で、「楽器」というモノにまず焦点をあて、囃子の中でも、世界遺産に登録されている能や歌舞伎で活躍する「小鼓」という楽器をとり上げました。日本独自の発達を遂げた、世界遺産の音、響きといえる打楽器です。

小鼓は１本の胴、2枚の革、それを結び組み立てる紐の、大きく三つの部分からできています。『胴』は、砂時計型をしています。桜の木で作られ、内を空洞になるよう彫り、表面には漆を塗り、蒔絵で装飾する場合もあります。『革』は、主に馬の革が使われ、打つ革を「表革」もう一方を「裏革」といいます。これらの胴と革を組み立てる紐を『調べ』と呼びます「縦調べ」「横調べ」という麻製・朱色の二種類の紐を小さな紐「小締め」で革に固定しています。

小鼓の奏法はこの調べを締めたり、弛めたりすることで音の高低をつけます。調べを締めて「タ」という高い音、弛めて「ポン」という低い音に打ち分けます。楽器の音はこのように歌にして「口唱歌（くちしょうが）」という方法で伝承されています。

小鼓とコンビで活躍するのが大鼓（おおつづみ）で、小鼓より乾いた高音を奏で、「チョン」という音で表します。“うれしいひなまつり”という童謡の中に『五人囃子の笛、太鼓～』とあるように、小鼓、大鼓、笛、太鼓、そして謡をうたうための扇で、五人囃子になります。この五人囃子の音楽編成で現在「能楽」が演じられています。

江戸時代、能楽・五人囃子の伴奏に三味線が加わり、「歌舞伎」の音楽として発達してゆきました。メロディも豊かになり、リズムも2ビート、4ビート、8ビートと細かくなってゆきました。打楽器の編成も小鼓、大鼓、太鼓以外に鉦などの金属製のもの、木魚などの木製のものなどが加わってゆき、舞台向かって左手（花道のある下手＜しもて＞）側に「黒御簾＜くろみす＞」と呼ばれる客席からは見えない場所でも演奏されました。黒御簾の中心は大太鼓で、もともとは開演閉演などの舞台進行の合図で使用されていましたが、三味線との合奏や情景描写も担当するようになりました。川の場面で「水音」、海の場面では「波音」を演奏したり、風音、雨音、雪音など自然現象を表現する手法も生まれ、歌舞伎をよりゴージャスに彩る役割を囃子は担ってゆきました。

明治期になり、西洋音楽の影響を受け、箏、尺八など和楽器との合奏が盛んになり、現代では囃子とオーケストラとの共演、ジャズとのセッションも行われています。

この様に囃子をはじめ、真の伝統芸能は常に固定せず今に至っています。これからも伝統を守るため、囃子は変化し続けてゆきます。今後はアートと音楽による本当の意味でのコラボレーションをしてゆきたいと思います。アートと音楽が創る日本文化は日本のみならず世界の宝です。未来に向かって共に歩みましょう！

小鼓
～革、胴、調べで
組み立てる～

五人囃子になってみよう！

歌舞伎音楽の手法 ～水音、雪音など～

第 56 回 aaca 講演会　「環境建築の未来」に参加して

三宅賢一
株式会社　大林組
設計本部プロジェクト設計第４部
日本建築美術工芸協会　法人会員

「環境建築の未来」とテーマを掲げられた講演会は、*-Green building＋Iots=ZEB-* というキーワードと、半田の美しい街並みのスライドから始まりました。
小さな街並みの美しい景観と、街に寄り添う「ミツカン」という企業の「やがていのちにかわるもの」というコーポレートメッセージを具現化した「MIZKAN MUSEUM」を巡る興味深いお話は、やがて *-Regenerative Architecture-* という、次世代の環境建築のあり方へと展開していきました。

① 景観
1804年に創業したミツカンは、海運を支える半田の運河沿いに工場など様々な施設を構えたとのことです。
静かな運河に面する、黒い下見板張りの壁と、瓦屋根そして青空に突出する煙突などの景観は、場所と時間そして、一企業の活動が密接に結びついて唯一無二の景観が生み出されたものだと感じました。
本社棟、実験棟、ミュージアムなどの施設計画にあたり、半田の景観の継承、保存に主眼を置き、施設配置検証や、街並みのデザインコードの読み取りなどを進められたとのことですが、BCPを踏まえた構造形式の採用、保存部分と再生範囲の検証や新しい素材の採用、ポイントで配置されるシンプルなロゴサイン計画など、様々な試みにより、単に保存にとどまらない、まさに次世代に継なぐ「継承」が実現できたのだと思います。

② 建築
「MIZKAN MUSEUM」については、見学動線を追って、施設内部が紹介されました。街並みに溶け込む外観の印象に比べ、スライドで紹介される内部空間は非常に大きく、おおらかな印象を受けました。
景観に寄り添うファサードデザインと同様に、内部空間の構築に当たっても、展示空間の小屋組への古材の再利用や、ボイドスラブ（無梁架構）採用による階高スケール感の統一など、テクスチュア（素材感）、イメージ（感覚）の継承が綿密にかつ誠実に実践されていることに、強く感銘を受けました。
ミュージアムの建築計画において、特に今回の講演テーマである「環境建築の未来」を感じたのは、下見板張りを活用した外壁ダブルスキンです。ガラスファサードの内側に、旧下見板張の壁を保存し、蓄熱などによる、省エネを実現したとのことです。まさに、景観の継承と、省エネを融合した環境建築の素晴らしい試みだと感じました。

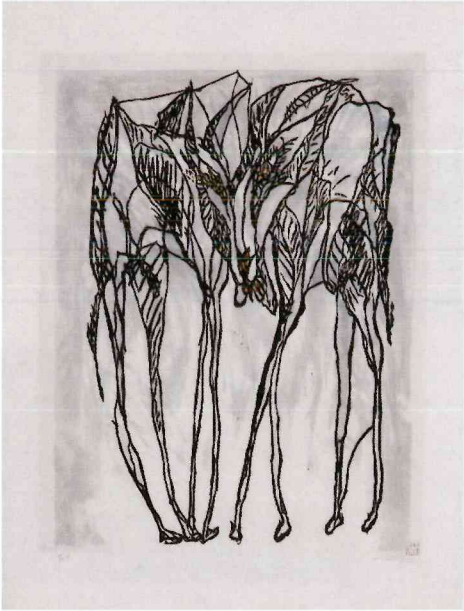
③ 環境
「MIZKAN MUSEUM」を含む、ミツカン本社エリアの整備事業は、国交省の推進する「省CO2先導事業」として採択されたとのことです。
新築であれば、新たな技術、手法を採用し省CO2を実現することは比較的可能かと思われますが、既存の施設を保存、継承しながらの、省CO2対策の実現は、非常に高度な環境技術に係る検証が行われたのだと思います。
自然の水・風・光を最大限活用する技術として、「既存井水と太陽光集熱温水パネルによる熱源利用」「河川冷却風の煙突を介した自然換利用」「中庭水盤を利用した反射光の取り込み」「下見板張り再利用によるトロンベウォールシステム」などなど、様々な環境技術が紹介されました。それぞれの技術についてもう少し詳しくお話をお聞きしたいとも思いましたが、青空に映える煙突や、水盤の反射がきらめく軒天井、運河に面する下見板張りの黒壁など、その裏にある建築技術を微塵も主張せず、静かにたたずむ姿は、非常に感慨深いものでした。
中庭を中心に紹介された、お祭りなど人々が集い、風や光を感じながら施設を利用されている光景は、冒頭紹介された、運河沿いの街の佇まいや、建物に施された高度な自然エネルギー活用に係る環境技術の要素と重なり、ファンタジーとロマンに満ちたユートピアのイメージが喚起されました。

講演の最後は、大震災後のパラダイムシフトを踏まえた、防災と環境や、建築のIOTと、再生可能エネルギーの活用など、まさに次世代の環境建築のあり方についての、興味深いお話しが展開されました。
その中で、2050年に向けた先進国の、80%温暖化ガス削減目標に向かって、既に今まさに設計を進めている建物の目標は示されているのだ、というお話は、非常に印象的でした。

美しい半田の運河沿いの街並みや、ミュージアムの紹介に始まった今回の講演は、「時」と「人」を中心に据えた、「景観」「建築」「環境」が融合した次世代の環境建築のあり方が示され、建築設計に携わる者にとって、非常に示唆に富んだ内容でした。

香川　亮
沖縄県立芸術大学
絵画専攻准教授
日本画家
日本建築美術工芸協会会員

私は幼少の頃より、動物園が好きで楽しい遊びとしての動物たちとの対話が有りました。その様な事が絵を描く切掛けで有った様に思います。そして少しは、増しな絵が描ける様にと楽しい絵画の世界に身を置きまして今日に至りました。大学で教員として絵画の職を得ることが出来た事も有り、以前から機会があればジョルジォ・アンリ・ルオーの銅版画が大好きで「ミセレーレ」やボードレールの「悪の華」の様な版画を動物や鳥で制作してみたい思いが浮かんで居りましたので、ここ10年間は木版画でと言う思いだけで何かに取り付かれた様に、制作して参りました。



白き獣Ⅱ　2004　61.0×45.5

私は何か新しい絵画性を希望するにしても、日本画と言う分野に属して居りますので、日本古来の伝統技法を用いて出来るだけ日本画らしからぬ表現性で制作する事としました。そんなイメージ先行型の技術の伴わない私の木版画との対話は、何をやっても失敗ばかりでした。表現の自由性どころか自分自身を心の檻の中に閉じ込めて来る日も時間があれば、版木と向き合う日々でした。そんな或る日、全国手すき和紙連合発行の「和紙の手帳」の中の一文に、和紙の生産戸数は最盛期の明治期には六万八千五百数戸だったものが、平成１３年には三百九十数戸まで減少したとの報告文でした。

私は大きな衝撃と共に心の中に熱いものが込み上げて来ました。私の生まれ育った広島は、中国山地の盆地でして小さな山間の村や町です。小学校の時に体験学習として社会見学で行った和紙漉き工場も、美しい広葉樹と渓流の地にひっそり佇む、まるでお伽噺話に出て来る様な小さな和紙工房です。山地名水に恵まれ紙漉き場は水に輝き、大きな天窓の外は渓谷の自然を望む美しい景色でした。今、出来立ての漉かれた和紙は天日干しにされ白く輝いていました。私にとって木版画を摺る行為は、和紙有っての行為であり、和紙有っての木版画となって行きました。木版画に使用される和紙の特質は一言では語れない固有の性質を持つものが多く有り、生き物の様に思われます。和紙は千年の時を悠悠と生き、しなやかにして優美な表層は兵どもとしか思えません。

鳥Ⅱ　2014　52.0×39.0

自画、自刻、自摺りを主とする日本の創作木版画も百年の時を迎え、すでに伝統として今日に至って居ります。「私の木版画展」は、この創作木版画における伝統と現在の一視点として、個人研究発表とさせて頂きます。多くの諸先生方と研究機関の皆様方の温かい御支援のもと、展示会を催す運びと成りました事に深く感謝申し上げます。

「香川亮　木版画展」
【沖縄県立芸術大学研究発表】

会期　2016年８月29日（月）～9月3日（土）
ＡＭ10：00～ＰＭ6：00（初日はＰＭ1：00より、最終日はＰＭ3：00迄）
※会期中無休
会場　日本橋　小津和紙　小津ギャラリー
〒103－0023　東京都中央区日本橋本町3-6-2

時代の華一輪　「美津島徳蔵　―― 画廊ビルを舞台に」

村野藤吾　1953

天方光彦

フジカワ画廊 専務取締役

牛島憲之芸術継承基金事務局

飯島一次美術館設立を願う会

日本建築美術工芸協会会員

28年前に日本建築美術工芸協会が社団法人として発足の折に、フジカワ画廊創業者の美津島（本姓水嶋（1909～1997））と共に入会しました。画廊に在籍し50年目を迎える私が最も敬愛した美津島の業績をテーマとします。1900年以降、旧松方コレクションを軸に日本人は好景気時代、円の強さで海外の美術作品を日本の為に一級作品を選んで買い入れました。美津島は1947年にフジカワ画廊を設立します。敗戦後我が国は貿易再開の目途が立たずドル不足の苦難が続き、大蔵省為替委員会と通産省はこのままでは国が持たないと民間所有の一級作品の緊急輸出、いわゆるドル稼ぎを考えます。当時の法規上、輸出は無条件Ｌ/Cの代金先取りで、サンプルの無い絵画作品は海外の買手にとっては売手を信用するだけの無謀に等しいものです。

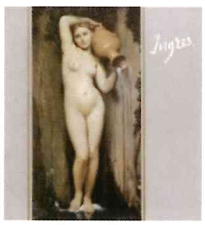
取り急ぎ実行可能な人物を探す為、見識ある洋画家の山下新太郎、石井伯亭両画伯に相談します。そして、信頼出来てその任にふさわしい者として美津島が推選されます。戦争に負けたとはいえ、日本の為にせっかく手に入った文化財流出の手助けは慚愧の思いに堪えません。しかし、作品の持ち主は焼失した家の再建や事業復興にもなり、国からも助けて欲しいと頼まれ、承諾します。そこで、有名な世界的画商のジョルジュ・ウィルデンスタインに直球の手紙を出します。「私が作品に付けた点数を信用して、それに値する価格でどうか日本を助けると思って買ってくれ」と。ジョルジュから「解った」と返事があり取引が始まると、他の有力画商も「豪胆なジョルジュが敗戦国の一画商を信用した」と驚愕し応じます。国内の業者達が顧客から依頼を受けた作品の輸出にも美津島のサインが大いに役立ちます。結果としてドル稼ぎは成功します。美津島は暗澹たる気持ちになります。これらの名作は二度と日本に戻らないと…。将来日本が経済復興する時には借金してでも日本の為に名作を買う事を心に誓うと同時に海外の超一流画廊に負けない立派な仕事で世界に誇れる文化国家の礎を築くという大志を抱きます。

そのための舞台として村野藤吾先生に画廊ビルの設計を依頼します。1953年に完成したビルの開館披露「泰西名画展」では、マネ、モネ、セザンヌなどの名作が展示され、多くの著名人が駆け付け、「良くやった。昨年開館した東京のブリヂストン美術館に負けない良い仕事を期待する」という身に余る祝意を寄せられます。日本のＧＮＰが世界第2位となった1970年頃、海外から訪れる美術関係の要人から世間話として国を代表する西洋美術館の年間購入予算はいくらですかと聞かれますが、とても恥ずかしくて2,000万円位だとは言えません。そこで石橋正二郎様と美津島が民間を代表して政府に購入予算を上げる様、芸術議員連盟を通じて要望書を出し続けた事で、特別に予算が三段跳びに上がります。しかし国の他の施設に比べとびぬけていたため、以後20年近くそのまま据え置かれました。

1977年美津島の藍綬褒章受章時の記念祝宴は代表世話人土方定一、世話人河北倫明、村野藤吾、牛島憲之の諸先生方が取り仕切って盛大に挙行されました。画商の祝宴に現役館長自らが世話人をされるのは異例中の異例で、誠に光栄な出来事でした。土方先生は全国美術館会議議長、神奈川県立近代美術館館長、河北先生は京都国立近代美術館館長。

1978年頃、経済発展の中で日本の貿易黒字に対する日本たたきの外圧がかかり、国としての対応に迫られ、今度はドル減らしの必要に悩みます。美津島はこの時こそと思い、通産省の旧知の藤原一郎氏に大蔵省に交渉して欲しいと訴えます。「今こそ国立美術館の予算で買えない是非に欲しい作品をこの機会に海外から直接緊急の輸入をすべきだ。私が戦後すぐドル稼ぎで日本を救う為に輸出してしまった作品の総額は今の貨幣価値に直せば、500億円近い。どうか実績額を国が所有出来る美術作品に使って欲しい」と。大蔵省が検討の結果、国は多額の赤字国債を出しており、希望する実績金額の1/10の約50億円に減額されましたが、2回に分けて国立美術館数館に振り分け、それぞれ希望の作品を海外より購入する事が出来ました。1989年には仏国より文学芸術勲章最高位のコマンドール（日本の文化勲章に当たる）を授与され、日本からは美術商では前例の無い業界では初の勲三等瑞宝章を受章し、日仏両国より破格の待遇を受けます。1997年の美津島逝去の際には社葬の葬儀委員長を藤原一郎氏が務められ、中山公男先生（美術館連絡協議会理事長、群馬県立近代美術館館長）の弔辞では「国立美術館でのブールデル展やアングル展、牛島憲之展、県立美術館でのザッキン展、ルドン展等への多大なご協力、画商の枠を超え美術文化の普及に力を尽くそうとする貴方の姿勢と識見、美術への愛と優れた鑑識眼を備えた貴方という偉大な画商の他界と共に一つの時代が過ぎ去ったと感じつつ、貴方のご冥福を祈ります」

美津島が去って19年。今振り返ると高い志、やり遂げる覚悟と行動が周りの方々の心を開き、“時代の華一輪”として信頼を寄せていただけたのだと感じています。



時代の華一輪　「アーティストと経営」

古後信二

建築家

ラッツ・アーキテクツ株式会社
代表取締役
株式会社 エー・アール・ジー
社外取締役

この度の熊本阿蘇大分地震において、皆様から大変ご心配いただきました経緯があり、お礼を込めてこの会報への寄稿をさせていただきます。
大分を中心に、熊本、福岡、宮崎、山口、沖縄と100件に迫る完成作品があります。住宅が８割ですので、住宅作家という位置付けになろうかと思います。
熊本市に２作品、阿蘇市に2作品あり、地震直後は大変心配しましたが、大きな損傷はないという事でホッとしております。

私の作品は、在来工法をベースとし、外壁には9mmの合板で面剛性を高め、さらには、床にも24mm合板を用いて水平剛床としておりますので、以前、福岡西方沖地震でも香椎の住宅が震度6弱に見舞われましたが、一切の損傷なしでしたので、耐震性には自負があるところでもございます。
本来でしたら、被災のレポート的なご報告がタイムリーかと思いますが、それほどの報告もないのが逆にもどかしいくらいでしょうか。

現在、大分というローカルな地域を拠点に奮闘しております。
1998年に創業し、今年で19年目。
グッドデザインアワード通算10回受賞を含む100件を超える受賞実績も出来、中堅建築家として、まずまずの活動をしております。

CASA NAKANOSHIMA（大分県佐伯市、2013年）

さて、建築美術工芸に関わる方々にとって、最も苦手な事は、経営という事になるのではないでしょうか。
私の場合、独立当初はアトリエ・ラッツという名称で、個人事業主からスタートしました。29歳の頃。
数年間はどうやって生きていたのかというレベルでしたが、徐々に作品が評価され、仕事が増え、スタッフを雇用し、有限会社、株式会社へとステップを踏み、社名からアトリエを省き、ラッツ・アーキテクツ株式会社と社名変更しております。法人化してから10年が経過しました。この過程は、まさに、建築家という職能と、経営者というものの間で格闘していた時期と言えるでしょう。一時期は社員6名まで大きくし、若手でも取締役に抜擢し、代表取締役会長という肩書きを持つ時期もありましたが、いろんな挫折もあり、現在は代表取締役社長に復帰し、最小限のスタッフでやりくりしております。創作行為と経営は二律背反するのだと、半ば諦めておりました。そんな折、沖縄で創業４０数年を数える建築設計事務所「株式会社エー・アール・ジー」とご縁が生まれ、社外取締役として、月の半分以上を沖縄で過ごしています。また、東京、山口のクライアントと大きな取り組みを開始しておりますので、4箇所を転々とする毎日でもあります。
地震当日は、東京でして、そこから沖縄へ飛び、大分に戻ったのは震災後2週間は経過しているという有様でしたが。
エーアールジーの見事な経営と見事な作品群。
創業者である会長から日々薫陶を受けるとともに、経営陣の一角として、デザイン顧問として、陣頭指揮をとる場合もありますし、若手スタッフの育成にも尽力させていただいております。私にとっては40代後半からの手習いのスタートと言ってもいいかもしれません。
創作と経営は二律背反しない。そういう事を体現している企業です。建築設計の場合、組織化していく道筋はありえなくもない世界だと思いますが、経営が良くなると、作品性に犠牲が出るジレンマもあるでしょう。
美術や工芸の世界では、なかなか、経営していくレベルはいばらの道ではないかと思います。一流の作品を創出するのが本筋ですが、そこに、一流の経営が加わり、一流の社員還元がある。　クライアントに満足していただくのは無論の事ですが、主宰者、そのスタッフまでが、明るい未来を描けるような組織作り。

作家の作品性というのは、それがエネルギーと言っていいでしょうが、そこにエゴが含まれます。それでも構わないという思いもありますが、そのエゴを乗り越える輝く未来がありうるのか。エゴによって、周囲の人が犠牲になってはいないか。
生涯のテーマになると思いますが、大分、あるいは沖縄の地で、建築家人生の第二幕のでっかい大きな華一輪、咲かせてみたいと思います。
「花びらの色は白か黒かのどっちかだ」
長渕剛の歌詞が胸に響く今日この頃でした。

会員活動レポート　「日本橋の戦前倉庫をギャラリーに」

石川　雅英
建築家　一級建築士
アーキテクツオフィス　代表
日本建築家協会正会員
日本建築美術工芸協会会員

日本橋小網町

東京都中央区日本橋小網町の名は、室町時代に始まって、太田道灌治世の時に定着し、愛されてきた由緒正しき町名である。戦後、郵便配達の便利性向上、区画整理などの理由で、至るところで町名を合併した。この小網町も、人形町3丁目になりそうなところを、ケシカランと街中で反対して、この名が残ったそうだ。だから、小網町には、何丁目の表示が無い、町名の後は、いきなり番地である。この歴史ある土地に、私の建築設計事務所+カフェ+ギャラリーは位置しています。番地は、16-16、戦前の絵図と登記簿から調べると、昭和4年ごろの鉄筋コンクリート造3階建ての倉庫でした。

私がこの東京のど真ん中に、この建物を発見したのは、13年程前でした。その頃、私は、大手ゼネコンに所属して、ホテル・旅館や商業施設を中心に建築設計をしていて、独立を考えていました。独立する際に、古い町家でも改造して、事務所に出来ないものかと漠然と考えていました。東京でも、街を歩くと築地から、本郷の辺りまで、ポツポツと戦前からであろう建物が焼け残ったものを見かけます。そんな中、事務所候補の倉庫を見にいって、近くにあるかなり古い廃墟を偶然、発見しました。持主を探し、実測させてくれとお願いし、図面を造り、耐震の簡易診断をして、とうとう、そのまま、私の事務所にする提案をさせてもらいました。そして、1階をカフェ、2階をプライベートなギャラリー、3階をオフィスにしています。

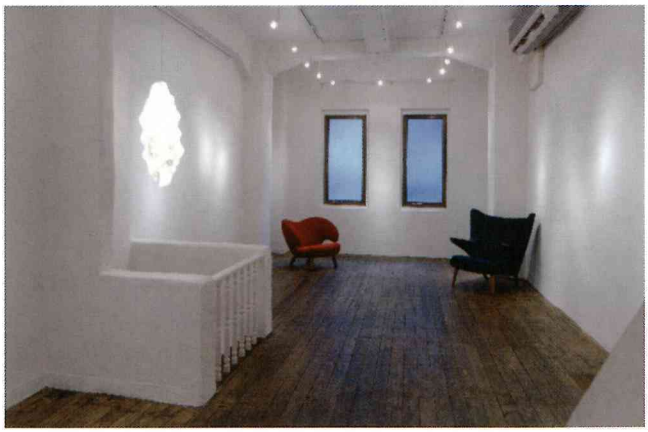
改装前の倉庫の状態

1階のカフェ

設計事務所の打ち合わせスペースを兼ねたカフェとなっています。家具は、好きな北欧ミッドセンチュリーモダンのフィンユールやウエグナーのヴィンテージが、雑然と置いてあります。時々、詳しい方が「これは、本物ですか？」と驚かれていきます。

2階ギャラリー

とても急な階段を登りますと、20坪ほどのプライベートギャラリーにしています。昔の倉庫らしく、天井は高く、壁は漆喰仕上げ、床は檜の無垢板で、長年使いこまれ、味わいがあるので、オイル仕上げにしています。ＮＹのソーホー以上にソーホーぽいと云ってくださる方もいます。若手から大家の方までの、発表の場として、提供させていただいています。ジャンルに制限は無いのですが、「個展」を原則として、お願いしています。深い理由は無いのですが、展覧会は展覧会として、一つの作品として考えていることと、作家の方の表現をするには、個人の考えが濃密に反映することで、プライベートギャラリーなのだから、よいのではないかと考えているからです。是非、個展を考えている方、珈琲を飲みがてら、覗きにきてみてください。



改装後のギャラリーの風景

「竹中工務店の仕事と写真家の眼」に参加して

岩井光男

建築家

日本建築美術工芸協会副会長

「竹中工務店 400 年の夢」—時をきざむ建築の文化史—

対談「竹中工務店の仕事と写真家の眼」を聞いて

岩井光男

400 年を超える歴史をもつ竹中工務店の歩みを建築文化史的視点から俯瞰した展覧会が 2016 年 4 月 23 日(土)～6 月 19 日（日）世田谷美術館で開催された。美術館のある砧公園は私の時偶の散歩道である。昭和 30 年代「東京都砧ゴルフ場」として都民に開放され、昭和 40 年代から「ファミリーパーク」として整備されてきた。大きな樹木と広大な芝生広場が昔のゴルフ場の面影を残している。美術館は昭和 61 年 3 月に開館した。建築家内井昭藏の代表作である。有機的な平面形状と正三角形のトラス状の柱型をモチーフにした独特のデザインで構成された 2 階建ての建築である。内井はこの作品で日本芸術院賞、毎日芸術賞など数々の賞を受賞している。因みに生前は建築美術工芸協会の理事としても活動していただいた。

5 月 21 日（土)、美術館講堂で上記展の関連企画として写真家村井修、松葉一清武蔵野美術大学教授、門川清行竹中工務店副会長の三氏による対談を拝聴するために美術館を訪れた。5 月の爽やかな風と眩しいほどの光と豊かな緑に囲まれた美術館はその風景のなかに落ち着いた品格ある佇まいを見せていた。写真家村井修の生み出す作品は被写体の物理的形態から光と影によってその内外面に潜む魅力を表出し、私たちに感動を与えてきた。建築家内井昭藏、写真家村井修、両氏は私の尊敬する人たちである。この日の村井先生は写真家としてスタートした昭和28年頃のご自身の活動からお話を始められた。話題の中心は建築家丹下健三の旧東京都庁舎、東京カテドラル聖マリア大聖堂、国立代々木競技場第一、第二体育館などの建築、東京計画 1960、スコピエ都心部再建計画などの都市計画、また建築家白井晟一の親和銀行本店（佐世保)、ノアビル(港区)、善照寺本堂（台東区）の作品、彫刻家佐藤忠良、流政之、澄川喜一の彫刻作品の写真をスクリーンに映しながら撮影時のエピソードを交えて作品の目指した意図について話を展開されていた。なかでも国立代々木競技場第一、第二体育館をワンカットに収めるための場所探しとその場所での撮影時のエピソードはたいへん興味深く拝聴させていただいた。この体育館は近代を代表する名建築であるが、写真もまた東京オリンピック(1964年)開催を控え、日本が世界に向けて飛び立とうとした時代の力強さを見事に捉えた名作である。私が建築を学んでいた学生時代には憧れでしかなかった建築家や彫刻家の話は今となっては貴重なものである。村井先生は国内に止まらず海外でも個展を展開し日本の現代建築、彫刻作品を伝えてきた。2010 年には日本建築学会文化賞を受賞されている。その永年の活動は戦後日本の復興と成長のなかで育まれた創造の世界における巨匠たちと軌を一にする。写真家村井修もその一人であったことを証明している。

東京カテドラル聖マリア大聖堂

国立代々木競技場第一体育館

会場風景

aaca2015 街なかミュゼ活動 第２弾

「街なかミュゼ活動」は、建築の内部及び外部空間や街並みに芸術・工芸作品を設置し、環境美化、人間性豊かな空間創造を積極的に展開していこうとする活動です。「街なかミュゼ活動その２」では、江戸川区一之江、船堀地区を中心にスターツＣＡＭ㈱が建設した12の建物に対して44作品、29名の応募申込がありました。 平成27年8月26日江戸川区船堀タワーホール「蓬莱」にて選考会として展示し、建物のオーナーの皆様、スターツＣＡＭ㈱の皆様、aaca選考委員【委員長 乕屋正（鹿島彫刻コンクール幹事長、アートプランナー）、選考委員　山極裕史(三菱地所設計株式会社、建築家)、平山健雄（展覧会委員長）】の三者で検討、作家の皆様も加わり活発な話し合いがなされました。　そして、江戸川一之江、船堀両地区の美的環境の創造へ、各建物の住環境に調和し、また街並みに新鮮な言葉を投げかける作品 20点（15作家）が選定され、設置されました。　　展覧会委員長　平山健雄

注：**太字**：建物名、(建築主・所在地)

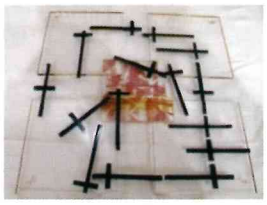
① **Wollte**　（江戸川区一之江7-29-3）

「記憶」
安河内敦子

「華やかな愛」
井上勝江

② コミュニティーケアセンター

（江戸川区一之江7-50-6）



「カノニックからの岐れ道」
平山健雄

「地に立つ」
川原　昭

③ アドラシオン

（江戸川区一之江7-49-5）

「オーロラ」
白野順子

④ 花水木 （江戸川区一之江7-89-12）

「夏越」
三上紀子

⑤ クール・ドゥ・サンセール

（江戸川区一之江７－１－３）

「大地の
エネルギー」
川原　昭

⑥ セイワ本社ビル

（江戸川区一之江3001）

「ハッパの物語」　信ヶ原良和

⑦ ALIVIO（アリビオ）

（江戸川区西瑞江5-5-58）

「見える音
聞こえる音」
野口真理

⑧ アーデント ミズエ

（江戸川区船堀7-7-13）

「ＢＥＧＩＮＮＩＮＧ」
田中ショウ

⑨ BRICK＆WOOD （1）

（江戸川区船堀6-11-25）

「時を超えて」　大河内久子

⑨ BRICK＆WOOD （2）

「双龍」　松本治子

⑩ アネシスリアン

（江戸川区宇喜多町1226-）

「ほどける風景シリーズ」　安原竹男

⑪ シャルマンクレスト

（江戸川区一之江7-75-4）

「エンドレスドリーム」
池田嘉文

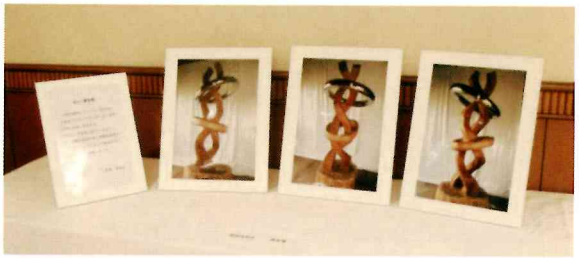
⑫ KG FLAT

（江戸川区一之江7-88-14）

「次の緑へ、３月の力・59、バニアンツリー、
春のシグナル、ジャンプ」
山崎香文子

「Relation 2014」
伊勢信子

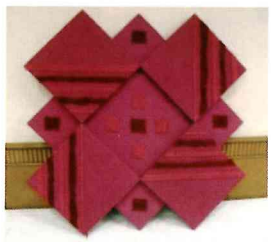
街なかミュゼ　応募作品

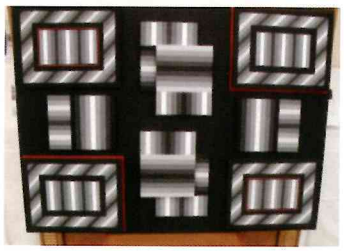


「異空間」　服部多加志

「アーバン・ボイド」　小尾昌弘

「重力について」　「重力についてZERO G」
関　玄達





「Time of red」　「Time of Time」
山崎和子

「誕」逸見幸也

「LOVEPOP2016」鍵井保秀

「軌跡」
吉田佑子

「寛」

「星の王子様」　「めぶき」
吉野ヨシ子

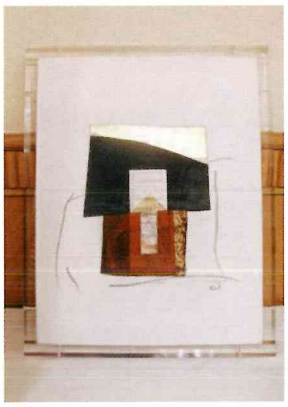
「Ｌのある形」　山崎　隆

「垂直と非垂直」
松田文平

「影法師」
二井　進

「時の融合」　渡辺雅子

「浮遊する影」　安河内敦子



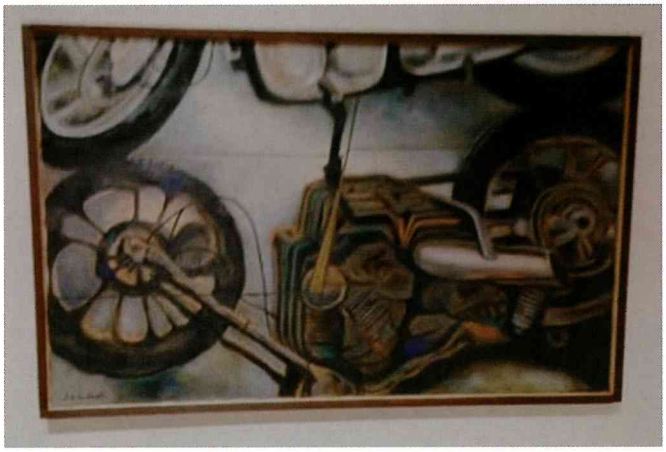
「GATE」
山崎輝子

「出発進行」
伊藤五惠

「風の通り道」　大河内久子

展覧会委員会からのお詫び

前会報７３号にて報告致しました、「第二回飛び出す作品展」の記事にて出品作品の掲載もれがございました。改めて掲載いたします。ここに作者の方々・関係者の皆様にお詫び申し上げます。



「投影Ⅱ」
高橋幸子

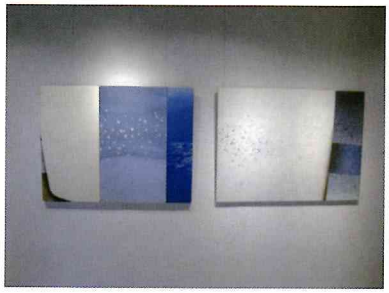
あわい展　「色と形、手の仕事 2016」の開催

ギャラリー入口
小野寺恵美　陶作品

あわい展「色と形、手の仕事2016」は、平成28年4月11日（月）～19日（火）、建築会館ギャラリー／イベント広場で開催されました。初日には会場内でオープニングパーティがあり参加作家と御来場の皆様との交流の時間を持ちました。

ギャラリー空間には平面作品：河村純一郎、甲谷武、櫻井孝美、笹岡敏明、笹岡慶鳳、長沢晋一、藤原和子、安原竹夫。ガラス：中村弘子、平山健雄。陶：小野寺恵美。イベント広場の野外空間には立体作品：今井伸治、野口真理、樋口恭一、吉野ヨシ子。１５名の様々な地域から参加の会員による出品でした。
たがいの作品の繋がりを大切に会場を構成をし、美術館、ホワイトキューブのギャラリー、郊外での野外展とは異なる空間を存分に楽しむ事が出来た展覧会となりました。　（文責　野口真理）

笹岡敏明
「日月雲雨」
（麻布・陶土・流木・顔料・アクリル）

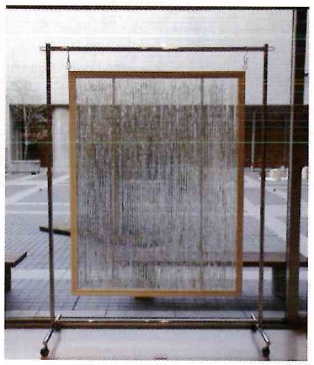


安原竹夫
「ほどける風景」シリーズ
―こだま―
（和紙・金属の墨・アクリル箔・顔料　他）

長沢晋一
「WALL」
（パネル・キャンバス・黒浜鉄・オイルパステル・箔　他）

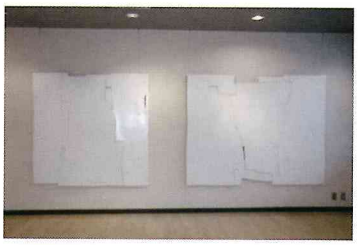
長沢晋一「WALL2016」
安原竹夫
笹岡敏明

小野寺恵美
「CLAY RIPPLE」土の波（陶土）



平山健雄
「ゲ・ノ・ム」（ガラス）

中村弘子
「穀物畑」（ステンドグラス）



甲谷　武
「原点回帰」「White Space」
（木・フッ素樹脂・プラスチック）

河村純一郎
「遠い日」（布にアクリル）

イベント広場全景

会場風景

あわい展に参加して

藤原和子

画家

ＣＡＦ．Ｎ協会会員

日本建築美術工芸協会会員

「あわい展」に参加して

立体と平面、白い作品と黒い作品、大きな作品と小さな作品・・・等々、両極にありながら、それぞれの関係性が心地よく、まさにこの展覧会の「あわい」を感じられる空間だったと思います。

あわい展への出展のお話しをいただいたとき、最初は、Ｆ１００号を出品し、他の作品との間合いを意識しようかと考えました。しかし、制作して行く時間の中で、「あわい」を繰り返し考え、会場をイメージしていくと、日本人の「曖昧さ」や私の作品に欠かせない「和・輪」から、文学作品の行間からよみとれる余情を楽しむ姿勢と重なり合い、今回出品した作品へと結びつきました。Ｆ８号を１０点、壁面に掛けた時は、それまでのモヤモヤしていた気持ちが、スッキリとしたものとなり、笹岡慶鳳さんと櫻井孝美さんの作品に挟まれ、小さな世界と大きな世界の「あわい」を感じる事ができ、おもわず微笑んでしまいました。今までに、たくさんの作品を制作し、たくさんの展覧会に出品してきましたが、このような姿勢で作品づくりに取り組み、彫刻家のように展示空間を意識したことは初めてかも知れません。あわい展実行委員の安原竹夫さんが「aacaの理念をベースに作品が建物の展示空間とコラボすることで、そこが意味ある空間になるか、その変容する姿をみせたい・・・」といわれているように、私自身も作品を展示する壁面だけをみるのではなく、建物の展示空間とコラボレーションする勇気を持つ事ができ、更に、自身の世界観を広げることができました。

世間ではいろいろな事が起こり、これからを考えなければならない状況の中で、この展覧会は、これからの美術のあるべき姿なのではないかと感じています。

この空間で皆様とご一緒できた事を嬉しく思っています。ありがとうございました。

会場風景

櫻井孝美
「緑と木と太陽」（厚紙）

笹岡慶鳳
「朧二首　春宵・淡月」
（和紙・洋箔・白金泥・墨）

藤原和子
「こころのかたち」
（キャンバスに
アクリル絵具）

樋口恭一
「カフカの門」
飛び込めビビッていないで！
そこからさきが現在の問題だ
（石）

吉野ヨシ子
「古代の詩」（金属）

今井伸治
「キューブ」（木）

野口真理
「ひそむもの」（陶）

NOMURA GROUP

株式会社乃村工藝社

本社 東京都港区台場2-3-4 TEL：03-5962-1171（代表）

「アピアランス」募集のお知らせ

会員の皆様の情報発信の場となる「アピアランス」のページを新設いたしました。
個人・法人会員を問わず、会員の活動・個展の案内・企業広告・ＰＲ等にご活用ください。
次号以降も継続して参りますので、奮ってご参加ください。
参加料金は　１コマ１万円（H55ミリ・W85ミリ）　４コマが最大です。

問い合せ先　広報委員会　会報担当
Tel 03-3457-1598　Fax 03-3457-7998　E-mail simpo@aacajp.com

Chefs-d'Œuvre Français

話題のフランス名作展

フジカワ画廊

GAUGUIN　RENOIR　MODIGLIANI　REDON　SEURAT

「時代の華一輪」

aaca会報74号へ寄稿

美津島徳蔵（フジカワ画廊創業者）が1987年に念願のモディリアニの傑作「黒ネクタイの女」をパリのオークションで日本の為に落札を成功させ、世界の話題となった。

天方光彦　日本建築美術工芸協会 個人会員

フジカワ画廊 専務取締役

牛島憲之芸術継承基金事務局

飯島一次美術館設立を願う会

国公立美術館 価格査定評価委員

フジカワ画廊

〒104-0061 東京都中央区銀座 8-5-4 銀座マジソンビル 3F

Tel 03-3574-6820 Fax 03-3574-6206

http://www.fujikawa-galleries.com

"コロンブスの心"によって新たな価値の創造、人と物とのここち良い関係の創造を目指しております。

STUFF9HAT Troop

広 常識にとらわれない心

論 自らを説明する心

武 挑戦する心

為 実行する心

スタッフナインハットは、サインデザイン・環境デザインをはじめ、商空間、働空間、遊空間など人と関わる様々な空間に、人とモノとの心地良い関係を創造、提案して行きたいと考えております。

経済産業省選定グッドデザイン商品

中小企業庁長官特別賞受賞

スポーツ文化の基礎を創る

ASO-BOARD

東福岡高校

スタッフナインハット株式会社

〒104-0061

東京都中央区銀座3-14-16 第二ミズホビル6F　Mail hotta@stuff9hat.co.jp

TEL 03-5550-3800　FAX 03-3541-6987　HP http://www.aso-board.com

広報委員会がスタートします。

27年度まで総務委員会に所属していました会報部会とホームページ部会が、この度設立されました広報委員会にその機能が移され活動する事になりました。

広報委員会の役割は、「会報の編集・制作・発行」、「ホームページの運営」、そして「協会の広報活動」が加わりました。「会報」では会員の皆様の作品発表の機会や活動のための情報収集・発信などを増やし、会員の皆様にとってさらに有益な情報誌になるよう努めてまいります。
「ホームページ」では、協会開催事業や会員情報のタイムリーな発信に努めていきます。「広報活動」では、特に外部メディアへの広報事業を強化していきます。

特に会報は、会員皆様からの寄稿で成り立っていますので、会員の皆様に以下のご協力をお願いいたします。

□ 個人会員の皆様へお願い

会報には、「時代の華一輪」、「会員活動レポート」など会員の皆様のページがありますので、是非皆様からの寄稿をお願い致します。また「アピアランス」のページでは皆様の活動予定などの広告ができます。次号は11月下旬発行を予定していますので、12月、1月、2月に個展などを予定されている方は是非ご利用下さい。（費用については、会報編集委員にご相談下さい。）

又、ホームページには「会員紹介」のページがあり、会員の自己PR、作品の紹介など活用（無料）できる様になっていますので是非ご活用下さい。

□法人会員の皆様へお願い

法人会員の皆様、特に新たに入会された法人の皆様、自社の事業、文化活動、社会活動などについての活動報告などの寄稿をお待ちしております。

またアピアランスのページも企業のPRの場に、是非ご活用ください。

□各委員会の委員長、委員の皆様へお願い

会報では、各委員会の活動や開催事業を今まで以上に広報していきたいと考えております。

委員会活動を紹介する寄稿をお待ちしています。
また事業の開催予告、案内もホームページとともに会報でも紹介してまいりますのでご協力をお願いいたします。

このたび、広報委員会に新たに4名の委員をお迎えしました。これからも会報・ホームページなど協会の広報活動にご参加いただける方を募集しております。

東日本大震災「芸術文化復興預金」への募金のお願い

2016年6月末現在　117．705円

協会では、2011年の東日本大震災により逸失した文化財及び地域文化の復興のため、協会指定団体へ寄付を行なう事業にて預託先を選定中です。会員の関係先で希望団体が有りましたら事務局迄お知らせください。
会員の皆様には活動やチャリティー活動等による売上の一部を募金に協力して戴きますようお願いいたします。
復興預金口座は下記に記載いたしました。

ゆうちょ銀行　〇一九店　当座預金　口座名：AACA芸術環境復興預金口　口座番号：0338383

編集後記

25周年を期して会報の構成を刷新されています。表紙には会員の作品、内容も会員の皆様の活動を中心に編集致しました。今号は通常総会、「街なかミュゼ活動」「あわい展」報告。媒体もジャンルも多岐にわたって活動される個人会員、法人会員、一般の方々のレポートによって構成されました。皆様の発信の一部となり開かれた会報にしてゆきますので、ご意見ご感想を是非お寄せ下さい。

発　行　一般社団法人　日本建築美術工芸協会
発行人　会長　岡本　賢
〒108-0014
東京都港区芝5－26－20　建築会館6階
Tel　03－3457－7998
Fax　03－3457－1598
Url　http//www.aacajp.com
E-mail　info@aacajp.com

編　集　広報委員会
委員長　飯田郷介
副委員長　会報担当　野口真理
委員　石田眞人　齋藤　泉　竹生田 正　田島一宏　中村弘子　三上紀子　山崎和子　山崎輝子　山下治子

協　力　美和野印刷株式会社